

キャリア形成のための地域協働で課題に向き合う体験型環境教育 ～ヒトとイノチをつなぐエゾシカレザー～

河 端 将 史
北海道標茶高等学校

【あらまし】北海道ではエゾシカによる農林業被害や交通事故などの人間社会への影響が深刻な問題となっている。近年エゾシカ対策課や消費者協会は特に食肉としての有効利用を推進しているが、角や革などの利用例は少ない。そこで本校生徒が課題研究（総合的な学習の時間）で専門家や異校種と連携しながら、北海道唯一の素材となる可能性を秘めたエゾシカの皮革製品を開発し、発信活動をすることで地域問題と向き合ってきた実践を報告する。

【キーワード】地域連携 課題研究 エゾシカ レザー 環境

1. はじめに

小規模総合学科である本校は平成 27 年度から目指す生徒像をキャリア教育とインタープリター教育に重点化し、系列ごとの科目グループや課題研究、地域連携行事の三位一体化を推進することで、総合学科の特色を明確化してきた。分掌、年次、委員会組織に加え、全職員が系列に配置されている。2 年次までのキャリア科目（産業社会と人間、総合的な学習の時間）や地域連携行事で高めた基礎的・汎用的能力は、3 年次課題研究の課題設定に欠かせない。2 年次 3 月にゼミ単位で地域に根付く課題を設定し、授業以外の時間も利用しながら特色ある研究を実践している。

本研究は 5 人の女子生徒により行われた。課題の設定に係わる行事への参加や課題研究（2 単位）活動、地域専門家や異校種との連携、キャリア形成について以下に報告する。

2. 活動方法

（1）課題の設定

2 年次 3 月にエゾシカに係わる 3 つの行事に参加した生徒でゼミを構成し、グループの課題を設定した。エゾシカを有効利用して廃棄問題や命の尊さ、地域ブランドになる可能性について発信することを決意する（以下、発信活動）。

（2）情報の収集

3 年次 4 月から課題の実現に向け、合同会社エゾプロダクト代表取締役菊地隆氏と連携し、北海道の特産品となり得るレザーアクセサリーの開発を計画した。また、全校アンケ

ートからオリジナルデザインを考案し、レザーにプリントすることで皮革製品を具体化した。さらに、販売とクラフト体験をパッケージ化し、発信活動のための外部出展やアンケートを計画した。

（3）整理・分析

3 年次 9 月末これまでの活動を整理・実行・分析するとともに外部コンクールへ報告した。10 月には外部事業で研究報告した。

（4）まとめ・表現

3 年次 10 月からはさらに 1 時間増単し、12 月の年次発表に向けたプレゼン準備と研究集録を執筆した。また、1 月校内総合学科生徒研究発表会と 2 月全道総合学科学習成果発表会へ向けて準備した。

3. 活動経過

（1）課題の設定

27 年 5 月 2 年次学校設定科目「北海道の自然」の授業の一環で、猟友会との連携からエゾシカの解体を視察し、生物学的な学習だけでなく命の尊さや重さを学んだ。

1 月標茶町で行われた北泉開発(株)常務取締役曾我部元親氏の講演会「エゾシカから、地域の未来を考える」への参加により、エゾシカビジネスや歴史、食の流通、養鹿業務、食品を学び、地域資源の活用と地域ブランドづくりについて考える動機となった。

2 月本校に合同会社エゾプロダクト代表取締役菊地隆氏と NPO 法人エゾシカ利活用協議会制作部長難波豊氏を講師に迎え、エゾシカ革のクラフトとその徹底活用について学んだ。

エゾシカレザー(図1)の触り心地の良さや、しなやかで丈夫なこと、プロのデザインの魅力に惹かれた。講演では、エゾシカの皮革活用をの話題を中心に、これまでの経緯や循環型地域資源の活用と環境の保全、いのちの価値、人とのつながりなどについて学習した。エゾシカ革でのイントレチャートを学び、イヤホンジャックアクセサリを製作した。これらのエゾシカを身近に感じることでできる体験からこのエゾシカレザーを環境素材として地域に発信する動機となった。このとき、地域の消費生活に関連する教育と消費者教育との連携推進～エゾシカの地産地消モデルを通じて～の事業推進担当者である北海道教育大学釧路校の鎌田浩子氏と出会う。



図1 エゾシカレザー (エゾプロダクト社)

(2) 情報の収集

3年次 28年4月自分たちのデザインしたエゾシカレザーアクセサリ(チャックの引手とストラップ)を用いてエゾシカから環境問題を考える活動計画を練った。

5月エゾシカレザーにプリントするオリジナルデザイン候補をあげ、約200人の全校生徒にアンケート調査し原画(図2)を絞った。



図2 デザイン原画

6月フォトショップで標茶高校オリジナルデザインを完成させ、菊地氏へレーザーで焼いてもらうよう依頼した(図3)。



図3 レーザー加工されたエゾシカレース

7月発信活動をするために、学校祭で全校生徒や地域の方にチャックの引手とストラップ(図4)の販売(図5)とクラフト体験(図6)を実施した。クラフトでは幅広い年代の方々(約20人)が参加され、アンケート調査やエゾシカレザーの展示も行った。



図4 生徒作成によるエゾシカレザー製品
左:チャックの引手,右;ストラップ



図5 販売風景



図6 クラフト体験風景

表 1 学校祭の販売会におけるエゾシカのイメージに対するアンケートの結果

性別	男	女				
利用方法	チャックの引手 ストラップ					
	33%	67%				
何につけるか	バック	文房具	財布	その他		
	23%	13%	30%	33%		
手触りはどうか	とても良い	良い	普通	良くない	悪い	
	63%	27%	10%	0%	0%	
エゾシカのイメージ	とても良い	良い	普通	良くない	悪い	
	37%	23%	33%	0%	7%	
イメージの理由	動物が好き	鹿肉が好き	シカは北海道の象徴	動物が嫌い	車道に出て迷惑	農業被害
	47%	13%	7%	0%	17%	17%

アンケート調査の結果を以下に示す。エゾシカのイメージは悪いが7%に対し、とても良い・良いは60%であった。意外にも地域の人はエゾシカに対して悪いイメージをもっていない。事故に遭いやすいという負のイメージもあるが、好き、北海道の象徴が60%であることから動物としては良いイメージをもっていると考えられる。また、チャックの引き手をバックに身につけるは23%、文房具は30%であることから、エゾシカレザーが北海道の特産品になる可能性が高いと考えられる。手触りについてはとても良い・良いが多くクラフト体験をとおしてエゾシカレザーの「柔らかい・しなやか・そのまま洗うことができる」という特性を発信し、エゾシカの可能性を伝えることができたといえる。

また、北海道教育大学釧路校の家庭科研究室学生2名に、自分たちの活動を伝えるとともにレザーアクセサリ（チャックの引手）クラフト体験を行った。特に、エゾシカレザーの特徴についても体感してもらうことができた。さらに、本格的に鎌田氏と菊地氏とともに連携を組み始める。

8月上智大学生フィールド型環境ゼミ「ヒューマンエコロジー・リバーズ」（教師3名、留学生11名、日本人2名）を迎え入れ、発信活動をするとともにレザーアクセサリ（チャックの引手）をプレゼントした。

9月標茶町教育委員会主催釧路芸術館での「我が町のお宝展」と本校主催「中学生1日体験入学」（図7）で、クラフト体験と発信活動を実施した。日本では触ったことがない人が多いことから、大変興味を持たれた。



図7 中学生1日体験入学講座

また、本校生徒が企画・運営する小学生への環境学習会「自然はぼくらの学校」において、プロジェクト・ワイルドのアクティビティを活用してエゾシカの生息地や生態を学習する体験的学習プログラムをデザインし、小学生9名に実践した（図8）。これらの事前学習として7月にプロジェクト・ワイルドファシリテーターの二杉寿志氏を講師として招き、自然体験活動やプログラムデザインを体験的に学んだ。



図8 高校生による自然体験学習会

(3) 整理・分析

9月末これまでの活動を整理し、第5回 AEON eco-1 グランプリと環境省第4回 Good Life Award へ応募した。後者では実行委員会特別賞を受賞した。

10月エゾシカフェスタ in 札幌にて約200人の聴衆の前で研究発表(図9)とクラフト製作のデモンストレーション(図10)を実施した。研究発表では活動を報告するとともに、活動前はエゾシカの生態や問題をあまり知らず、地元では交通事故も多いためあまり良いイメージがなかったことや無駄のない使われ方がされている例は少ないこと、エゾシカも一つの尊い命であり駆除した後も大切に使うべきであること、地域ブランドになる可能性があることを述べた。

11月には第2回全国ユース環境活動発表大会に応募したが全国大会への出場は逃した。



図9 エゾシカフェスタでの研究発表



図10 クラフトのデモンストレーション

(4) まとめ・表現

12月年次での課題研究発表会で見事勝ち抜き1月校内総合学科生徒研究発表会で口頭発表するとともにクラフト体験会を実施した。

また、2月には北海道石狩翔陽高等学校での道内総合学科学習成果発表会で本実践を発表した。

4. まとめ

(1) 社会で求められる資質・能力¹⁾の視点

3年間の教科・科目や行事で得られた「知識・技能」を生かして自分たちで地域社会に根付く課題を発見することで「学びに向かう力」を育み、自ら課題に向き合う主体性を得ることができた。

また、エゾシカレザーや消費者教育、自然体験活動の専門家との連携や小学生や中学生、大学生、地域の方との関わりから多様な立場を理解し「主体性・多様性・協働性」も高めることができた。特に、高校生が専門家と地域をつなぎ、エゾシカの生態や問題、活用方法、北海道の特産品となる可能性について発信することで「思考力・判断力・表現力」を一層高めることができたといえる。

(2) キャリア教育²⁾の視点

本研究での「体験型」環境教育活動をとおして、多様性の理解や他者の意見を聞いて自分の意見を正確に伝える能力をはじめとする「人間関係形成・社会形成能力」を総合的に育むことができた。また、高校生ならではの視点で環境教育にファッションを導入し、実践することで「自己理解・自己管理能力」を高めることができた。さらに、立場の異なる人とのコミュニケーションやプレゼンテーションをするなかで適切な翻訳能力(本校ではインタープリター能力)が必要となり、「課題対応能力」も高められた。何より、多くの専門家との出会いをとおして「キャリアプランニング能力」が得られたことは言うまでもない。結果として、本研究生徒5人の進路は大学2名、短大1名、専門1名、就職1名となった。大学はエゾシカと地域社会を、短大は幼児教育を専門的に学ぶ学校へ歩んでいる。

5. 文献

- (株)ベネッセコーポレーション: 未来を拓く「探究」導入編, pp. 1-5
- 山陽新聞社広告本部: KANKO TIMES Vol. 6, pp. 1-2